

1	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	16102001	チベット文化圏における言語基層の解明 – チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読	長野 泰彦 (国立民族学博物館・民族文化研究部・教授)	A
<p>(意見等)</p> <p>概ね順調に研究成果を上げつつあり、現行のまま推進すれば良いが、以下の2点が疑問点として残る。</p> <p>本研究は副題に示されているように「チベット・ビルマ系記述言語の調査」と「シャンシュン語の解読」という性質の異なる2種をもつ。</p> <p>1. 文献として遺っている未解読言語シャンシュン語を、それと同系と目される現代語を調査し、その過程で解読のヒントを得ようとする方法は独創的で興味深く、期待を抱かせる。だが、この言語の解読はこれまでの経緯からみて膨大な量の時間と高度な言語学的手法が要求される。「研究組織」にはこの作業に従事する2名の分担者が配置されているが未だに具体的な成果は提出されていない。一方で現代語の調査に関わっているほぼ全員がこの作業にも従事している。上掲の2種の研究を明確に分割し、言語調査班から得られた情報が解読作業班に流れるという方法をとることはできないものか。</p> <p>2. 川西走廊あるいはヒマラヤ地域の未調査言語の調査記述は重要な仕事であり、現在では調査環境もかなり整っている。報告書には「未記述言語を新たに発見した」とあり、数種の言語が掲げられている。実際にこの地域は未記述言語の宝庫といえる地域であり、「発見」の数を加速度的に増大させることも不可能ではない。なお、「ダパ語は今まで報告が皆無である。」というのとは正確ではない。ダパ語「メト方言」の記述が無かったのであって「ダト方言」の記述はすでに存在していた。</p> <p>研究協力者と連携して調査回数の増大と調査地域の拡張を図れないものか。</p>				
2	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	16102002	歴史的視角から分析する東アジアの都市問題と環境問題	妹尾 達彦 (中央大学・文学部・教授)	A
<p>(意見等)</p> <p>総括的な評価としては、順調に研究成果があがっているといえる。むしろ、わずか2年(H16、H17年度)の間に、「都市と環境の歴史学」を3集も出版したことは、驚嘆すべきことであり、研究代表者の精力的な取り組みを高く評価せねばならない。ただ、成果の多さは評価されるが、その内容が荒削りで概説的な論文もある。中間報告といっても、その方法論、研究の含蓄に鑑みれば、最終的な完成度に不安がのこる研究も含まれており、それらについては一層の努力が必要である。研究課題が「都市問題」「環境問題」といったスケールが大きく、それゆえ概論的、表層的に流れる傾向をもつが故、特に留意していただきたい。これらは、一部の研究者の論考ではあるが、今少し時間をかけて丁寧に、地に着いた実証研究を目指して、荒削りの弊を回避すべきであろう。</p> <p>また、代表者をはじめとして、研究分担者が他の研究課題(特定領域研究、基盤研究Bなど)にも、代表者もしくは分担者として取り組んでいる。本研究との関連性をもちつつ研究を遂行するものとしても、関与する他の研究課題の多さと、割くべき研究労力に不安がのこる。その目的の達成はできるであろうし、また数量面では、十分な実績をあげていると考えるが、後半の3年は、量よりも質的な面で研究の向上を目指してじっくり取り組む方がいいのではないかとと思う。</p>				